

<b>Title</b>	『「平和とスピリチュアリティ」：21世紀社会へのスピリチュアリティ論の貢献』 阿久戸光晴氏（学校法人聖学院理事長・院長・聖学院大学教授） （聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催：2015 第2回スピリチュアルケア研究講演会報告）
<b>Author(s)</b>	小野，久志
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.25No.3, 2016.3 :31-31
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5736">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5736</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センター主催  
 2015 第2回スピリチュアルケア研究講演会報告  
 『「平和とスピリチュアリティ」  
 — 21世紀社会へのスピリチュアリティ論の貢献—』  
 阿久戸光晴氏（学校法人聖学院理事長・院長 聖学院大学教授）



上段\_講演者：阿久戸光晴先生  
 下段\_研究代表者：窪寺俊之先生

2016年1月15日（金）に、聖学院大学ヴェリタス館教授会室において聖学院大学総合研究所カウンセリング研究センターの主催による、2015年度スピリチュアルケア研究講演会が、62名の参加者により開催された。当日は、窪寺俊之教授の司会進行のもと、本学理事長・院長の阿久戸光晴教授により「平和とスピリチュアリティー21世紀社会へのスピリチュアリティ論の貢献」の論題のもとに講演がなされたのち、質疑応答がおこなわれた。

講演は自己喪失の時代といわれる現代におけるスピリチュアリティ論の意味と意義を検討するところから始められた。本学総合研究所がその課題に取り組んできた経緯、スピリチュアリティ論が意識されるようになった世界的背景をふりかえり、総括するなかで強調されたことは、スピリチュアリティ論を新約聖書における霊性論から基礎づけること、そして、自己を超える座標軸からなされる自己認識がスピリチュアリティ論の根本にあるとまとめられたことは、現代社会におけるスピリチュアリティ論の意味論としてのみならず、実践

論としても大きな示唆を与えるものとなった。

更に講演では、スピリチュアリティ論を平和論と結び付けることにより、先述の自己超越論、謙虚さと共生の原理として解釈し直す視点が提示され、スピリチュアリティ論を個の問題として完結させるのではなく、スピリチュアリティ感覚に基づく愛の実践が平和を形成する源泉であり、また、そのような実践がスピリチュアリティ論においても必須の課題であることが強調された。

質疑応答では参加者の多様な問題関心を反映して、多岐にわたる問いがなされたが、それらは大きく3つの問題にまとめるが出来る。1点目は、現実に存在するテロや排他的状況の現出理由である。それらを克服するのは、平和の基礎にある人権尊重感覚としてのケア認識であるとの応答が貴重なものであった。2点目はその他者尊重と関連する霊性の回復をどのように考えるか、の問題であった。これについては人間尊重の回復の次元にとどまらず、神の似像の回復という宗教的感覚にもとづく変化成長の必要性が強調された。これは実践的には「相手のなかにイエスを認め合う」という感覚を通して、祈りを通してわかりあうことのイメージが提出されたが、そこから3点目の問題である、他宗教との祈りの共有という課題が見通される場所となった。また、個々の問いにおいても、魂と意識の相違、魂と霊魂の関連、一神教的世界観と平和の創出、日本国憲法における良心規定とスピリチュアリティとの関係、等、スピリチュアリティ論の可能性と豊饒性を再認識させられる応答がなされ、参加者からはより長い時間設定を望む声が多く聞かれたことであった。

（文責：小野 久志 [おの・ひさし] 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学専攻科博士後期課程）